
可笑しな国のアリス

尾崎拓都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可笑しな国のアリス

【Nコード】

N5047M

【作者名】

尾崎拓都

【あらすじ】

「ねえダイナ？何か面白いことって無いかな？」 15歳の少女アリスはつまらない現実には飽き飽きしていた。しかしある日、白ウサギを追いかけて穴に落ちてしまう…そこには「人間だけど人間じゃない」人が住む不思議で可笑しな国だった― 不思議の国のアリスを基にしたファンタジー小説

序幕 ― 帽子屋

とあるお茶会での話

「双子が死んだらしいぞ」

「嘘」

「嘘だ」

「……」

「白ウサギが死んだらしいぞ」

「嘘」

「嘘だ」

「……」

「改革が――」

「帽子屋？　もっとマシな嘘つけないかな？」

「考えるのがだるい」

「……」

「腐れ帽子屋」

「万年発情期」

「……喧嘩……やめ……うるさ……い……」

「あれ、起きてたんだ」

「……ん……」

「じゃあ嘘言うのはやめにするか」

「それがいいよ。何する？　こんなつまらないお茶会は嫌だよ？」

「……ふぁ……はぁぁぁぁ……」

「確かに…ジャムでもぶちまけるか」

「でもこの間公爵夫人にぶん殴られたじゃん。そのことで」

「……」

「……んー……んぐ……」

「怖かったね？　レベツカさん…。で、何する？」

「……………人数増やして盛り上げ…白ウサギも誘うか…」

「んー、賑やかになりそうで良いね♪」

「……………白ウサギ…は……………いない……………」

「え？」

「は？」

「アリスが……………」

「えっ」

「えっ」

「アリス、来るんだ」

「へえ…忙しくなるな…」

「城…書類が…………山…積み…………そのうち…僕…ら…に…………も……………」

「「うわ…………」」

「アリスが来るのは嬉しいけど、書類は嫌だね」

「どんな娘だろうなー…前回みたいに毒舌じゃなけりゃ良いけど…」

「へえ、前回毒舌アリスだったんだ？」

「……興味……」

「親父に聞いたけど、思ってることをズバズバ言ったらしいぜ…」

「ふーん……まあ誰でもいいか。うん」

「誰でもいいは酷いぞ」

「今日誰も誕生日じゃないよなー。パーティーするか。誕生日じゃないパーティー」

「おお、夜通しお茶会ですね帽子屋さん？」

「楽しみだなあ楽しみだなあ…アリスが来るまで、ずっとお茶会をやっているか」

「………ん……」

ゲームが始まるのは、もうすぐ

「それまでは、精一杯平和ボケするぞ」

序幕 ― 帽子屋（後書き）

初投稿：ではないけど投稿です
よろしくおねがいします

序幕 ― 城

「んで、白ウサギは行ったのかー」

「ええ」

「ふーん…次のアリスってどんな感じ？」

「前回のアリスの孫で、やはり前回のアリスによく似ていますわ」

「考えるより先に行動する、活発な少女です」

「ほうほう」

「陛下、アリスが楽しみですか？」

「ああ、楽しみさ…私が女王になって初めて来るからな…それに、アリスの話を聞いたことが無いから」

「あら、そうなのですか？ 私も詳しくないですけど…」

「陛下、確かジャックや帽子屋が詳しかったですよ」

「んー…呼びに行かせたいところだが…もう少しで来るんだ。まあ聞かなくても良いだろう」

「そうですかー？」

「メアリ…アン、エース、お前らは聞いてきたらどうだ？メアリは確か帽子屋と親しいだろう？」

「やー、僕はいいです」

「いえ、私も首を長くして待っていることにします」

「首を長く…？　メアリ、お前首が伸びるのか…！？」

「陛下…つつこんだほうが良いですか？」

「……………」

「いや、真面目に教えてくれ」

「”首を長くして待つ”、言うのは”期待して待つ”という意味の慣用句ですよ」

「へー」

「一番詳しいのはやっぱり白ウサギですよ。教えてもらったらどうですかー?」

「遠慮しとく。それならメアリに教えてもらおうかな」

「ふふ、リク様はそういう事に厳しいですからね…」

「陛下、よろしいですか」

「ジャックか、入れ」

「失礼致します。ついさっき…白ウサギがアリスに接触したようです」

「お、じゃあそろそろ…」

「ええ、もうすぐこちらの世界に…」

「ご苦労、ジャック。ではメアリにエースも」

「はい」

「はいー」

「今宵は宴だ！ 準備を急げ！」

「はいっ！」

「合点了解ー」

さあ、いらっしやい、アリス||リデル：

城^こはあなたを歓迎^こします

どっかの三姉妹

「はぁー」

「暑い？　そうよね、暑いわよね。今日すごい晴れてるんだもの…だからアリスも帽子被ってくればよかったのに…あ、私の帽子は貸せないからよろしくね」

「姉さんなんか勘違いしてるよね？」

私の、本を挟んだ隣に座っている姉さんの勘違いは天下一品だ。暑くて溜息を出したわけではない。

まあ、確かに今日は暑い。でも暑くて溜息が出るほどでもない。そう、なんかハワイっぽい暑さ…

と言っても私ハワイ行ったこと無いんだけど

「暑いから溜息ついてるわけじゃないの」

そうさそうさ、と言う風に、膝に乗っかっている黒猫のダイナがにあと鳴いた

私はダイナの首元を人差し指でかく

「暑いんじゃないってー暇…じゃなくて、つまんない…でもなくて…」

力を抜いて、木にもたれた。木は、熱くも冷たくもない。

「やることない…わけじゃないけど…退屈…そう、退屈なの！」

どさどさーと積みあがっていた本が崩れて、姉さんのほうに倒れた。膝や、読んでいた本の上に被さる。

ドサツじゃなくて、私を馬鹿にしたようにどさどさー…

「軟弱な本…。それで、アリスは退屈なのね？」

「うん」

「大変ねー。そういえばイーデイスはどこ？」

…あれ？

「あの、私退屈なんだけど」

「そうね、退屈なときってすごく大変よね」

「……………」

最近、いろいろあって庭へ遊びにこれてなかったけど…本を読んでいるとき、姉さんは他人のことに無頓着だ。

妹のイーデイスを探しているからそうでもないーとはいえない。

だってさっきイーデイスは「紅茶とかお菓子ぶんどってくるー」と、

私と姉さん言って、家まで戻った。

まだ5分くらいしか経ってない。

そうだ、姉さんは無頓着な上に忘れっぽくなるのだ

余談だけど、私の家は広い！お父さんがよー分からん会社の社長らしい。曾お祖父さんが設立したらしい。

詳しいことは知らない…というかどうでもいい

自慢話終わり

再度姉を見るともう本の世界に戻っていた。変わり身の早い人だ。

話し相手がいなくなったから、私は半分寝ぼけているダイナに言う。

「ねえダイナ？ 何か面白いことって無いかな？」

「ありません」

…Huh?

「あーゴメンゴメン、ダイナかとおもっちゃったんですかねー？

そんなアリス姉さんが滑稽で滑稽で…」

独り言なのか私に話しかけてるのか分からない言い方。

顔を上げれば妹のイーディスがいた。特徴的な大きい眼を三日月形

に細めている

まあ、姉として悔しいけど…可愛い。

イーデイスだけじゃない。姉さんも可愛い。

私だけ…あれだ。醜いアヒルの子…ってやつか。惨めだ…

「イーデイスもどってきたのねー、おかえり」

「ん、ロリーナ姉さんだいま」

イーデイスが”ぶんどってきた”紅茶の入ったポットや茶菓子を芝生の上に置く

平和な風景。ちょっとしたネガティブ思考は脳内ゴミ箱に捨てた

こんな平和な風景、壊すには勿体無い。まあ喧嘩はするけど姉さんもイーデイスも好きだしね…

なんつってかるーく思春期としては恥ずかしい事を思った矢先…

私はどうやら目がおかしくなったようだ

どっかの三姉妹（後書き）

少し長い…ですかね？

アリスと黒猫と白ウサギ

……H u h ?

(本日2度目)

茂みの中を、白い…多分、ウサギが通り過ぎた、気がする

気のせい、気のせいだと思うけど…服着てなかったか？

…気のせい、気のせい。ちょっと疲れ気味かな…

「アリス姉さん紅茶飲むー？」

「え、あ、うん…」

「ロリーナ姉さんは？」

「お願い」

不意にイーデイスに声をかけられ、ちよつとドキツとした。
なんか私の目がおかしいの、ばれてない…よね

ふわっと紅茶の匂いが広がった。
いいよね、なんかすごい優雅！

…だめだ…

また、さっきの白ウサギ。ばっちり服を着ていて…

「大変だ、遅刻してしまう…」

………Huh? (本日三度目

今、ウサギが喋ってた…

「アリス姉さん? どうしたの? さっきからお茶って言ってるのに…」

「イーデイス」

「何?」

「ごめん、ちょっと好奇心は抑えられないから…」

結局私は、自分自身の興味と好奇心に負け、ウサギを追いかけはじめた。

これくらいの速さなら、いける。

それに…前にダイナも走ってるからね

「えっ、ちよっ、姉さん？ アリスねーさん！？ と、ダイナも！？」

後ろにイーデイスの声が聞こえる。

「すぐ戻るから！ ちょっと待ってて！ 紅茶飲んで良いよ！」

走りながらウサギを見てみると…懐中時計も持ってるし。しかもすっごく綺麗

ちくしょーうらやましい…じゃなくて

「急がなければ…お茶会に遅れてしまう…」

あいつの脳どうなってんのかなあ…

角を曲がるとダイナが急に止まった。

白ウサギがいなくなってしまったようだ

私はダイナを抱き上げる

「むう…見失った?…」

周りをきよろきよろ眺める。

と、

「…うわっ…何コレ…穴?」

見覚えの無い穴が目の前にあった。しかも結構深い。

庭は割と覚えているほうだけど…あ、もしかしてあのウサギはこの中入ったのかな?

「じゃあ仕方ないよね…ウサギもご臨終かも? ダイナ、姉さんとイーデイスのところに戻ろっか」

「何言ってるんですか」

「いや、だから、ウサギがご臨終したから私たちは平和な風景に戻ろうかと…」

そこで気がついた。

私は、誰と話をしているのだろうか?

恐る恐る後ろを振り向く。

後ろにいたのは、私より3つ4つ年上の男の子…いや、男の人かな

「いや、死ぬわけじゃないですって」

「じゃあ何！？ 20文字以内で答えて！ 私の意識が飛ぶ前に！」

恥ずかしいことに、私は半分以上涙目。

今にも声を上げて泣きそう…なのに

「詳しくは向こうへついてから説明しますね」
爽やかな笑顔を私に向け、彼は言った。

向こうって…やっぱ天国？

姉さん、イーディス…ありがとう…

短いようで長い15年間でした…

そんなことを思いながら、私は意識を手放した

ドアだらけの部屋から

「……………はっ!？」

勢いよく体を起こしたら、なんだかよく分からないけど狭くて丸い部屋に居た。

見回すと、ドア ドア ドア…

私は中央に設置してある一本足のテーブルの上に乗っていた

コスプレイヤー・ウサギ耳青年の姿は見えない

「落としたくせにトンズラしやがって…見つけたら平手打ちしてやる」

そうだ。あいつさえ追いかければ、私は紅茶を堪能していたんだ。

思い返すと、自分の阿呆さ加減に頭が痛くなってくる

でも、今はそんなことしている場合じゃないのだ。

「ドアを開ければ、元の場所へ帰れるかしら…?」

私は、自分の目の前からどんどんドアを開けていった。

開けていった…ではなく、開けようと試みた。

全部鍵がかかっていて、開かない。

蹴ってみたけど、びくもしない

「……っ…」

狭い部屋、1人だけ。　だんだんと不安になってくるのが普通じゃないか？

私は不安に足して、焦りも感じてきていた。

頬を冷や汗がつう、と流れた

「どうすればいいの…？　鍵は、ないの…？」

自分が見たときには、どこにも鍵がなかった。
でも、もしかして……と、周りを見回してみる

「……………あるし」

鍵はテーブルの上に置いてあった。気付かない方が馬鹿と言えるくらい普通に。

私はそれを手にとって、また手当たり次第に鍵穴にさしていった。すると、一番小さくてギリギリ通れる位のドアが開いた。

とりあえず鍵はポケットの中にしまって、外へ出た。爽やかな外の匂いがする

大きく深呼吸を2回して、目を開くと、少し離れたところに

「アリス、お待ちしておりましたよ。さあ行きましょうか」
例のウサギ耳青年が、殴りたくなるほど爽やかな顔で私を迎えていた。

―彼を見た途端、私は走り出していた

ドアだらけの部屋から（後書き）

少し短めですー

白ウサギと

走る、走る…

私の目はきつと涙がたまっていることだろう…

コスプレイヤーウサギ耳青年の前まで来ると、私は思い切り右手を振りかぶった。

涙をためた目に、私は満面の笑み。そして心の中は…

——ふざけんなクソウサギ

平手打ちを実行しようと振りかぶった手を勢いよく振ると、

ウサギ耳青年の頬にあたる寸前、手首をつかまれた

「っ!？」

「女性は暴力をふるもんじゃないですよ」

「だって、あんたのせいでしょう!？ 暴力ふるなとか、ふざっけんじゃないわよ!!！」

つかまれていた手を思い切り引っ張る。

案外軽かったのか、すぐに振りほどけた

怒りをこめた平手打ちが妨害されたことにより、私は腸が煮えくり返るような気持ちだ。まあよく分かんないけど。

眉尻をぎんつとつりあげて口を再度開く

「まずここはどこなのよ!？ 私は元の世界に帰りたいの! あなたが私を穴の中へつれこんだんでしょう!？ 死ななかったからよかったけど!!！」

ぜえぜえと息が荒くなる。まだまだ言い足りないけどことばにならなかった

だって…不覚にも腰が抜け、へなへなと力無くすわりこんでしまったのだ

ウサギ耳青年は私を驚いたような目で見ていたが、腰が抜けた私を見てにやっと笑った。

(怖っっっっっ!!!!)

いつのまにかひっこんだ涙がまた軽くでかけた
(「っと危ない」)

目をごしごしとこすって普通に見せる

ウサギ耳青年は笑いながら溜息をついた。

「大人しくなりましたか：でも仕方ないですね、虚勢は所詮虚勢の
ようです。とりあえず城へ向かうので、動きながら聞いてください」
「ちよっと待ってよ、私はあなたについてくつもりは————えっ
？」

ひよい、と体が浮くような感覚があったと思いきや、私はウサギ耳
青年に横抱き：もといお姫様抱っこをされていた。

私は男性が苦手だ。小学生のとき、よく苛められてたから：

(※苛められてたというのは、特有の「好きな子ほど苛めなくなる」
というものののだが、アリスはそれを知らない)

というか、こんな抱きかたされるのは初めてだ。マジコワイ。冗談
無しに怖い

それに、よくよく見ると：このウサギ耳青年、結構な美形じゃない
か：

「も…無理…」

前にもあつたよなコレ…

また、私は意識を手放した。

まあ今回は落ちるのではなく浮いたのだが

白ウサギと（後書き）

早く帽子屋が書きたいです…
長いよ…いちいち長い…

というかこの小説だれか読んでくれるのでしょうか…？
読者様、いらっしゃったらありがとうございますっ！

その女の子がまた美形。ってか、めっちゃ可愛い。

ウェーブのかかった赤い髪、黄色い目、透けるような白い肌に細い腕。

頭には少し大きい冠が乗っかっていて、髪の色には劣るけど、赤いドレス。

…まあ、持ってるものは異常だけど

「…鎌？」

私が聞くと、女の子はにこっと笑ってうなずいた。

「綺麗だろう？　いつも拭いたり磨いだりして、ピカピカにしているんだ」

か、可愛い…

言ってることは…うん、知らない。

「そういえば紹介が遅れましたね。彼女は紅の女王、ローザ様です」

「じょおー？」

「ええ。女王陛下です」

「以後よろしく！」

ウサギ耳はえた青年に、鎌常備の女王…すごいなこの国…

「よ、よろしく。私はアリス・リデルっています。ところで…」
「何？」

「この国とか、色々教えてほしいんですけど…」

一番聞きたかったことを聞くと、ローザは露骨に嫌な顔をした」

「あっ…ごめんなさい…」

「アリスは悪くない。只…私説明苦手なんだ…って訳で、リク、頼んだ」

「はい。では陛下は仕事に戻ってください。書類、溜まってるでしょう？」

ローザは再度、さっきより嫌な顔をした

うん、可愛い。私もあんな風になりたかったなあ…

「あーもう分かったよ！ やる！ だからもうそういう事言うなよ

！ 言ったらやらないから！」

「約束ですよ！？ 約束破ったら向こうに急かされても手伝いませんからね！」

いつの間にか兄妹喧嘩みたいになってた。

よくイーディスと喧嘩したなって思い返す。

——いつになったら目が覚めるんだろう？

「ねえ、いつになったら目が覚めるの？」

「……アリス、これが、夢だと思いますか？」

ローザはもう自室にもどったようだ。

私は体を後ろに倒し、腕で目をふさいだ

短い時間の中で色々な事が起こって、頭が混乱している。

「”アリス”というのは、昔、この国に迷い込んできた女の子の名前なんです」

「え…？」

リクはぽつりぽつりとこの世界の説明を始めた

「でも、その女の子はすぐに元の世界へ帰ってしまったんです。最初は、それだけでした。しかし、それから少し経つと、住民に異変が起こり始めます」

「異変…?」

「はい。」自分達だけ”という世界に飽き、違う世界の子供を招き入れるようになったんです。元々この世界には”上位者”という存在があり、アリスが来るようになった元となるのはその上位者達なんです」

ちんぷんかんぷん……

少しずつ疑問を解消するために、私は恐る恐る手を上げた

「あの、リク…さん？」

「呼び捨てでいいです」

「あ、じゃああの、リク…」上位者”って何？」

”上位者”というのはゲームの…ああ、丁度良いです」

「え？」

「彼が来るので、そのとき一緒に説明しますよ」

さっぱり訳分かんない…

でも、今は聞いても何も答えてくれなさそうだ。

私は大人しく口を閉じて、その、『彼』とやらを待つことにした

鎌常備（後書き）

だんだんと意味不明な文章になってきましたね！！

騎士と上位者

『彼』とやらを待つこと数分。

空はすっかり橙色になっていた

「…まだ？」

「いや、もう来ますよ。ほら」

リクがほら、と言った瞬間に、ノックの音が聞こえた。

「どうぞ」

「よっ」

手を上げながら入ってきたのは、騎士のようなごつい服を着た青年だった

黒色の髪で、毛先が少し赤いのが特徴だ。肩により長いものは、後ろで一つにまとめてある。目は特徴的な黒色。

「えっと…？」

「彼は”上位者”ハートの騎士、エースです」

「よろしくつ。エースでいいよ」

つり気味の目が私を見て、手を出す。

私はそれに応え、手を出し握手をした。

「よろしく。私はアリス・リデルです」

「あれ？ リク君、アリスにまだ説明してないの？」

説明というのは、さっきリクが言っていた事だろう。

「あつ、今、リクが説明していてくれて…」

”上位者”についてです。君が来たら説明しやすくなるかと思いまして」

「ふーん」

エースは近くにあった椅子にどかっと座った

リクは、さっきの話を続きはじめた。

「”上位者”というのは、【白ウサギ】や【ハートの騎士】、【紅の女王】…そして、まだ会っていませんが、【帽子屋】【チェシャ猫】【白の女王】など、あと何人かいます。称号とか役割みたいなものですよ。そして”上位者”以外は一般人…といってもそう名乗るわけではないですけどね」

「“上位者” ははじめましてのときに【ハートの騎士】のエースですみたいに言うけど、普通の人はそういうのは言わないよ。上位者の方が確実に少ないからね」

色々説明が一気にくる。そういえば私こういうの苦手だった気がする。

でも、よくよく考えてみると、単純だった。

「“上位者” っていうのは、特別な存在な訳ね？」

「一番簡単に省略するとそうなりますね」

それなら私にも分かる。流石に。

それで、私が拉致された訳は…

「私たち…この世界の住民は血筋を特別なものと考えています。だから、最初に迷い込んだアリスは、あなたの先祖でしょうね」

私の心の中を読んだ風に言った。それとも、表情に出たかな？でも、ちんぷんかんぷんだった内容は、なんとなく理解できた。

「うん。なんとなく分かったわ。それで、どうして上位者って言うの？ 何か待遇でもあるの？ 物が安く買えるとか」

一瞬の沈黙。

ぶつ、と、エースが品なく吹き出し、部屋には大笑いが響いた。

騎士と上位者（後書き）

騎士さん、よく分かりません

夢か現実か

「上位者割引…ねえ…くくく…」

「分からないんだから仕方ないじゃないっ！」

エースはひとしきり大笑いして、やっと喋れる状態に戻った。
私は恥ずかしいったらありやしない

リクを見ればそっちもそっちで笑いをこらえてるじゃないか…

私ははあ、と大きく溜息をついた

「割引とか、なんかそういう感じのはないのね」

「ええ、むしろ上位者には、書類という嫌われ者が沢山送られてきますからね…」

「そうそう。忙しいときは部屋いっぱいになるほどだよ…特に女王陛下とかリク君は、ね」

書類。私も父さんの部屋でよく見た。

一度、目を通してみたけど…あれはきついだろう…

「さて」

急に、エースが立ち上がった

「話してたらもう夜だし、寝るよ」

気付けば、もう夜だった

結構長い時間話を聞いていたみたい

「そう、おやすみ、エース」

「おやすみなさい」

「アリス、リク君、おやすみ」

エースは手を振りながら出ていった

「さて、僕もそろそろ御暇しましょう」
リクも立ち上がった。

まだ聞きたいことはあるんだけど…
まだ全然時間が経っていないはずなのに、少し慣れた感じがしてしまふ。

私の視線にリクが気づき、にこっと笑った

「また明日、もっと詳しく教えますよ」

私の頭に手をのせて、ぽんぽんとたたく。

…なんていうの？ 秒殺スマイル？

まず、女の子だったらきやあきやあ言いながら見るような、美形の青年である。…ウサ耳さえなければ
そんな人が笑ったら…

「…やっぱ秒殺スマイル…」

「？ アリス、何か言いましたか？

「いやっなんでもないよ!!！」

自分が男性苦手でよかったと思う。

そうじゃなかったら倒れてるもんね…

考えをなくすように、言う

「と、とりあえず、おやすみ…」

「おやすみなさい、アリス。身の回りの事は…後で使用人をよこしますね」

パタンと扉が閉じた

私は部屋を見渡した

最初からこの部屋にいたけど…こんな豪華なところに居ていいの？

まず、このふっかふかで大きい、しかも天蓋つきのベットである

まあ、割と家が大きいとは言ったけど…庭が妙に広かったただけだ。
家のサイズは普通…

ホテルじゃないんだし、ここまでもこもこなのは滅多に無い。

そして、広さ。

大きい。大きい。結構大きい。

床、赤い絨毯だし…

壁は…真っ白。純白

幾つか壁がなくなっているところは、何か他の部屋につながっているのかな…？

ってか、その前に

…これ、現実…？

そういえばこれ現実って一度も聞いてないや…確か…うん。

じゃあこれは、夢

「夢にしたって豪華よね」

独り言が、妙に広い部屋に響いた。

上級なメイドさん

この世界の、私の存在

つまり”アリス”の存在

それは、只の玩具とか暇つぶし用具とか、そんな感覚なのかな
それだけのためにここへつれてこられるって

ね

コン、コン

控えなノックの音が聞こえた

「はあい」

いつの間にか私は眠っていたらしい。体を起こした。

寝る子は育つって言うけど、夢で寝ても…って気持ちになる

「失礼致します」

ドアから顔を出したのは、メイドさんらしき女の子だった。年は同じくらいかな、女王様に負けないくらい可愛い。

女王様は元気な感じだけど、この子はおとなしいって感じ・・・かな

「はじめまして、アリス様。私、メイドのメアリィアンと申します。本当に端くれですが、一応”上級者”です」

メアリィさんはサイドに垂れた黒髪を揺らし、微笑んだ。エースといい、この世界には黒髪の人が多いようだ

そして”上級者”…。色々な人がいるみたい。

「はじめまして。私の名前は…知ってますよね、アリスです」

「よろしく願います。私、アリス様の世話係と言われましたが…殆どはリク様が行うと仰っていらっしやいました」

同じ年くらいに見えるのに、しっかりしているなーと、感心してしまふ

なんていうか、格好いいのに、可愛い、たおやか。

「そう仰っていたとはいえ、このような仕事をリク様に押し付けるわけにはいきません。なので、私にしか出来ないことや、リク様がいらっしやらない時、また、私に頼みたいときも、なんなりとお申し付けくださいね」

「あ、なんだかなり邪魔くさくてすみません…」

私はある意味、いつの間にか城に居座っていた怪しい奴だメイドさんにとっては、邪魔以外のなんでもないと思う。”上級者”だとはいえ…

しかし、メアリさんはとんでもないとも言うように首を横に振り、少し上ずったような声で言った。

「そんな滅相も無い…！むしろこの城の者は皆アリス様を大歓迎していますよ。そして、敬語はおやめくださいな」

「大歓迎…ですか？それで、敬語って…メアリさんの方が年上じゃないですか？」

「メアリ…さん”…!？」

メアリさんは顔を蒼白にし、世界の終わりのような表情で、頬に手をあてた

「アリス様という高貴な存在の貴女が、使用人風情に敬語など…敬称までっ…! なんといい方なのでしょう…しかし、私目などに敬語は unnecessary です。年など関係なく、使わなくてもよろしいんですよ」

「えっ…じゃあ、メアリ…?」

「ええ、それでよろしいのです。自分より劣った者に敬語を使う必要はありませんよ」

劣っては無いと思うけど…むしろ私の方が…とは思ってたけど、メアリにとって、敬語は使わないほうがいいのかもしれない

とりあえず私は、敬語を使うのをやめにした。

「あの、それで…この部屋とか色々教えて欲しいんだけど…いい…?」

メアリは頬にあてていた手を離し、蒼白な顔から一瞬にして元の綺麗な肌に戻し、にこっと笑った

「いいですよ。説明いたします」

上級なメイドさん（後書き）

意味不明ですね…ねむい…

そういえば夏休み入りました

かみの玩具

「お分かりいただけましたか？」

「ええ…ありがとう」

私は、メアリに部屋の詳しい説明をしてもらった。

流石、とでも言うべきか…1つ1つの説明が丁寧で分かりやすい。

それにしても

「無駄に広いのねこの部屋…」

それが私の正直な感想。

こんな邪魔者…まあ拉致されただけ…に、こんな部屋はもった

いない。本当に。

装飾品として絵画とか壺とかもあるし：

でもメアリは、「とんでもありません！」と言う。

「だって、アリス様がいらっしゃったのですよ？ そんな神にも近い存在のアリス様には、この部屋も狭いほどですよ…」

「へえ…」

暇つぶしのために拉致られたというのは分かったけど…

か…

「えっ、ちょ、神！？ 神何ソレ！？ ああ、紙！ 紙クズですね
わかります！！！！」

「なっ！ アリス様！？ どうされましたか！？」

「どうしたもこうしたも！！ 神に近いって何！？ だからああ紙
に近いんですね！？ と！！！！」

「とりあえず、落ち着いてくださいっ！！」

落ち着いていられるかあ！とも思ったが…
メアリがかなり心配そうな顔をしていたから、意気を荒げつつも黙
った。

もう夜になって結構過ぎたよね。近所迷惑だったか…

私は、少し声のトーンを下げるように意識した

「それで、メアリ」

「紙ではなく、神ですよ」

眉尻を少し下げながら笑うメアリ。

そういえばリクが言ってたけど…先祖代々って事は、昔の拉致被害
者も私と同じような反応だったのかな…？

そもそも、なんで拉致被害者が神に近い存在なんだろう？

夢？ 夢だから？ 思い出せば、リクがこれが夢だと思いかみたいな事を言っていたけど…夢じゃないと確定したわけじゃない

「あの、メアリ」

「私から詳しく話すことは禁じられているのです。申し訳ありません」

「え…」

意味深な言葉。

眉尻だけではなく、目尻まで少し下がっている。笑っているのに。そして視線は、私を向いていない。

メアリは、いろいろ教えてくれるとき、いつも私の目を見ていたから、少し不安になる。

「あ、あの」

「さあさ！ もう寝る時間になりました。アリス様、お疲れでしょう？ シャワーを浴びて寝られても大丈夫ですよ！ シャワーの準備は整っています！」

「っ…?」

この変わりように、私は疑問と、少し恐怖を感じた。

さっきまでの感じは全く残っていない。まるでそんな時間無かったように。

そんな私をよそに、メアリはエプロンのポケットの中から小さなベルを取り出し、ベットの近くの棚に置いた。

「このベルを鳴らしたら、私——以外かもしれませんが、使用人がアリス様の部屋まで来ます。必要なときに鳴らしてくださいね」

明るいけど、大人しい。メアリはそんな感じ。

今思ったけど、隠し事をするときに…明るくなったり、するのかもしれない……

メアリはちらっと私の目を見て、ドアへ向かった

「では、私は失礼致します。ごゆっくり…。それと」

メアリはもう私の方を向いていない。そして、ドアが閉まるまでに、独り言のように呟いた

「……エシャ猫なら…全てを…」

詳しく説明なんて聞かなくてよかったのかもしれない。

どうせ私は”上位者” っていう主人に忠実な玩具

逃げる術なんて、残っていやしない

主人より上の立場の玩具なんて何処にあらうか？

可笑しな国は割と普通？

「おっはよおおおおおおおおおおおおう！！！！」
「ぐえっ」

急にお腹あたりに何かがふってきた。

幸い胃の中には何も入っていなかったため、異物が口から飛び出ることは無かった

一瞬飛びかけた意識を取り戻し、目を開けば、見えたのは鮮やかな
紅色

あれ、友達にこんな子いたっけ？

私の友達は、くるくるな縦巻きの子とちょっと不思議な子：

「アリス？　もしかしてまだ寝て…起きてるじゃん。おはよ！」
「お、はよう…ございますっ」

紅い子がひょっこりと顔を出し、私は全部思い出した

この子は…女王様の…ロー…ローザ様…だっけ？

「そいえばアリス、昨日風呂入ってないのか？ 服が一緒だけど…
メアリが寝巻きとか用意してくれたろ」

「あっ…」

やっちゃまった…と思う。私は昨日、メアリの言葉の意味を考えてたのだ。

お風呂入ろうかなーとか考えてたのに、いつのまにか寝ちゃったんだ…

「後でシャワー浴びれますか…」

「うん。基本自由」

その言葉に安心する。

シャワー浴びないとむずむずして仕方ないし、その前に不潔！

「てか、今何時だろ…」

何時間寝たんだろう？

きよろきよろと周りを見回したけど、時計はかかっていなかった
そして今更だけど、「夢でも寝られるのか」と、夢の便利性を知る

「ん」

につこにこと本当に音が出そうな笑いで、ローザはハンターケース
型の懐中時計を私の目の前に出した

時刻は10時。もう12時間くらい普通に寝てるんじゃないかな…

「ありがとう。それで、その時計…」

「ん？これ？」

ローザ様は、差し出した懷中時計の蓋を閉めた。これまた鮮やかな紅色で蓋部分には薔薇の彫刻が施されていた

「わ…綺麗」

「時計屋の特注だ。綺麗だろう？」

なんというか、芸術作品を褒めるときみたいにな、言葉が出てこない

私が必死に言葉を選んでいると、コンコンとノックの音がして、扉が開いた

おい私まだ何も言ってないぞ…

「アリス、失礼します。…と、陛下もいらっしゃったのですか」

扉から顔を出したのはリクだった。途端にローザは機嫌が悪くなる

「アリスと話しているのにズケズケ入ってくるとは…いい読経してるじゃないか」

「陛下が話している方が悪いんですよ。僕もアリスと一緒に居たいんです」

「だからといって割ってはいるのは許されない！」

「陛下、自己中心的ではいけません！」

兄妹のような言い合いが再発。ローザはこうだと、女王様じゃないみたい…

そしてリクは、黒いスーツに赤いネクタイ白いYシャツに黒い靴…そして白いウサギ耳に白い髪

相変わらず頭が白い。服装はよく覚えてないけど…多分昨日と同じだ

私がじとつとリクを見ていると、彼は視線に気付いたのか、

「おはようございます」

「あ、おはよう…」

思い出した。秒殺スマイルじゃなくて悩殺スマイルでした

「おい！ 私を差し置いてアリスに挨拶するなんて…不躰な白ウサギめ！ 首刎ねるぞ！」

「アリスのほうが大事です！ 不躰とはなんですか…？ それに首、刎ねてみてください。その前に逃げますから…」

「ストップストップ。あの、怖いことはなさないでください」

首を刎ねるだとか、グロテスク…

「そうですよ！ 陛下は仕事に戻ってください！」

「そういつて私を追い出して、二人きりになる気だろ。不純だ。お前が仕事に行け」

「僕は仕事が終わってますから…」

「ぐぐ：お前、いつの間に…」

ローザは一通りの会話が終わったあと、ちらっと私を見た
口調は男の子っぽけど、やっぱり仕草は女の子らしいと思う。可愛い。
本気で可愛い。

「ローザ様、仕事の休憩のときとか、終わった後、たくさん話しませんか？ 私ももっと話したいんですけど：仕事が多くなるのは嫌じゃないですか？」

半分：というか八割本音、2割嘘：くらいだろうか

私はリクに聞きたいことがあった。それに、明日教えてくれるって約束したから。

「アリスが：アリスが言うなら：絶対だからな」

ローザは眉尻を下げて、渋々というように部屋から出てった。
ずいぶんと聞き分けがいいな：

急に疑問がふっと浮かんだ

「そういえば、リク」

「なんででしょう？」

「ローザ様って、いくつ？ どう見ても私より年下よね」

ここは私の夢の、可笑しな国。

だけど私は女王政より王政の方が良いと思っている
女王だとしても、頼りなさそうな女の子より、たくましくて頼れ、
国民第一の成人した女王様の方が、絶対に良い筈だ

「私は：小さい女の子より、ローザ様の母親くらいの年齢の人の方が、色々分かっていて、女王様には適任だと思うの」

”母親”

その言葉を聞いて、リクの表情が硬くなった：気がする

そういえばリクもずいぶんと若い。なのに女王様と平気で話している

「リクもさ、いくつ？　女王様と結構親しげに話せるみたいだけど
：どんな職なの？」

リクの表情が少し和らぐ。そして、それまで閉ざしていた口を開いた

「僕は、女王の側近という役割です。”白ウサギ”となった者は、
紅の国、白の国共々――女王側近とならなければいけない決まりな
んです。僕の年は18。アリスより3つ年上ですよ」

”紅の国”に”白の国”。初めて聞く言葉だ。我が夢ながら複雑。
そういえば：エースも一緒に居たとき、”紅の女王”とか”白の女
王”とか言ってたっけ

「紅と白と国があるのね。もしかして女王は、小さい子じゃないといけないの？」

「いえ、そんなことはありません。と言っても、白の女王は15歳ですが……陛下は、14歳です。しかし、国を治めることに關しては素晴らしいですよ……。まあ、あの我侭さえ無ければいい子なんですけど」

ふつとリクが笑った。

もう一つ疑問が浮かび上がる。全部答えを聞いてないけど、すぐに分かるし……さっきの事はもう一度聞けば良いだろう

「ねえ、ローザ様とリクって兄妹？ 兄妹喧嘩みたいなことたまにやってるけど」

「幼馴染ですが、兄妹ではありませんよ」

そう言ったところで、「そういえば」と何かを思い出したような素振りを見せた

「姓をおしえてませんでしたね。ローザ様は、ローザ・エアルドレッドという名前です。紅の国ができた頃から、代々エアルドレッド家の娘が女王をやっていたんですよ

「へえ……本当に血筋を大事にするのね。それで、リクは？」

「僕は、リク・スタンフォードです。スタンフォードも代々白ウサギを務め、女王の側近として生きていました」

「ふうん……」

割と長い苗字だなあ……と感心する。

そして、私の可笑しな国も割と普通だなあと思った。もっと意味不明でもいいかなとも思っただけ……

夢から覚めたときが大変だからね

「普通は苗字って名乗らないの？」

「ええ。」上位者”は名乗りません。それほど重要じゃないですからね」

「じゃあ、エースにもあるの？ 苗字」

「ありますよ。エース・アンダーウッドといいます。只、先代の”ハートの騎士”は結婚する前に亡くなりましたから、アンダーウッドの代はエース君からです」

「そうなんだ…あ、それでさ」

私は、最初の疑問を口にする

「ローザ様も、エースも、リクも結構若いけど、その上の代の人はいないの？ いくらなんでも、女王が14って若すぎない？ さっきも聞いたけど、ローザ様や…リクに母親はいないの？」

リクの表情が強張った。まずいことを聞いただろうか。

さっきも”母親”という単語で表情が変わった…あれは気のせいじゃなかったのか

「アリス。ローザ様の前で”母親”という言葉を言わないでください…。全て、話します」

そう言ったリクの顔は、少し悲しそうだった

――――シャワー浴びるタイミング逃した…

可笑しな国は割と普通？（後書き）

外国人の名前とか、難しすぎる：

2～3時間軽く調べてました。趣味の力怖い

新しく知ったこと…アリスはKY

「ルカ…!!」 ルカ・ウィングファイアー…ルドオオオオ!!…!!」

きっと女王だと思われる、ベルに負けなくらいの大きな聞こえた。
リクを見ると、ドアのほうを向いて溜息をついていた。

「…あの、どうしたのかな? ローザ様。あと、ルカ…? って?」
「そいつがなにかやらかしたんですよ。いつも陛下に迷惑かけやが
って…あの××猫が…」

なんだかよくない言葉を聞いた気が…まあ、笑顔も怖かったりする
し…
それより

――猫

「ねえ、その猫って…」

「いつもニヤニヤ笑ってて、何を考えているのか分からない奴です。会ったら蹴るなり殴るなりしていいですよ…と、話の腰が折れてしまいましたね」

リクは、ベットに腰掛けている私の横に、ぼすんっと音を立てて座った

そして、風呂場を手で示した

「昨日、お風呂入っていないでしょう？ 話が長くなりそうなので、入ってきて良いですよ。僕は部屋に居ます」

「本当？ シャワー浴びたかったの。ありがとう！」

リクの意外な一言に驚く。

でもそれ以上に、不快感をおぼえなくていいのは嬉しかった。

「じゃあ、失礼して入らせていただくわ。それで…話は…」

「そうですね。じゃあ――アリスが聞きたいときに、聞かせましょう」

そう言って、部屋から出て行った。リクが部屋からでるときに、少し、人影が見えた気がした。

「へえ、あの子がアリス？ 割と可愛いんじゃないの？」

「何の用ですか？」

「酷いなく。女王からの言伝を持ってきたのに」

「君がアリスと深く関わる必要はありません。それで、言伝とは？」

「俺も上位者の一員であり、ゲーム参加者なんだけどな…。言伝ね。驚かないで聞いてよ」

「……………」

「帽子屋達が、動き出したよ」

「なっ……………」

「リク君はさ、あれでしょ？ ウサギ君の怨み買ってるんでしょう？」

あの子達真面目に強いからやだよね」

「君はヤマネの怨みを買っているんでしょう？ お互い様ですよ」

「それもそうだね。それよりさ、リク君は”ゲーム”の説明したの？」

招き入れるとかさあ…嘘八百だし」

「……………」

「そう怖い顔しないでよ。”奪い合いゲーム”の説明しないなんて、

アリスにも怨まれちゃうよ？ 一番危険なのは、誰でもなくアリスだもんね」

「盗み聞きとは性質の悪い猫ですね？」

「はは、俺チェシャ猫だもん。人を惑わすこととか、大好き」

「返事になってません」

「相変わらずお堅いなあ…ま、いいや。帽子屋には気をつけてね。アリスは…俺が奪いに行くよ」

「……でっけえ」

ここは、紛れも無く、風呂。

かぽーんという間抜けな効果音が正に相応しい…のかは不明だけど

風呂の端2つには、ライオンらしき彫像？があり、そこから熱いお

湯がざばざばと出ている。

メアリ曰く

「1つの部屋に、大きいお風呂と、小さいお風呂、それぞれ1つつ設置されています」

「好きなときに入浴が出来ますよ。それに、一人でのびのびと入ることが出来ます」

そんな説明を受けたわけですが…

「……………でっけえ」

「…………おズ様、アリス来たんだって。紅の国に」
彼女は、器用に林檎の皮を剥きながら、私に向かって言った。

「そう。貴女は：何がしたい？」

僕の問いに、彼女の手が止まり、表情の動きも止まる

しかし、その時間は一瞬。すぐに元に戻り、目線を自分の手元に向けた

「あたしは——あたしは、紅の城以外のところに、アリスを置いておきたいです」

「へえ、なんで？」

「——危ないじゃないですか。不確定要素が多くて」

彼女はくすりと笑う。僕は、これを聞いて嘘だと思った。

彼女も彼女で、僕が嘘に気付いていると分かっているだろう。

彼女の手が止まる。いつの間にか林檎は鮮やかな赤色から、黄色がかった白色に変わっていた

「で？ その林檎は僕にくれるために剥いたのかな？」

「まさか。あたしが食べたかったんです」

4等分されたうちの2つを皿に乗せ、僕の前の机に置こうとする。しかしその机は書類だらけだったため、彼女は積みあがった書類の上に皿を置いた

見れば、林檎はウサギの形。

僕は、彼女を見た。碧色の眼が光に当たり、輝いている。

短く息をつき、僕は椅子にもたれた。ずっと机に向かってたからか、腰が少し痛い

「――ま、やりたいようにやんなよ。でも、やりすぎると止めに入るからね」

「ほんとですか。ありがとうございますっ!」

彼女は、見事なまでに黒い髪の上についたそれを、嬉しげに動かしながら笑った。

「あいつらはもう動き出してる――君はいいとして、僕存在を丁寧に扱ってよ。これは、命令」

「御意。今度こそ――スタンフォードには負けませんよ」

「流石だね、その意気。ルナ・コレット………」
H i t m a n”
の名にかけて、好きなように暴れておいで」

この領土自慢の暴れ馬を小屋から離れたわけだ。
さあ、君達はどのように足掻くのかな？

いろいろなおもわく（後書き）

多分そのうち色々出てきます

最後のお二人は誰だろうね？

ヤマネ君と

「ふう」

無駄に広いお風呂場に唾然となりつつも、私は無事入浴を終了できた。

無事にーとはいっても特に心配事は無かったんだけどね

元の世界からずっと着ていたエプロンドレスは、少し良い香りがした。

おかしいな、短時間に洗濯なんてできるはず無いのに。

無意識に腕を組んで考える。と言っても”考えるより先に行動派”の私にそれは向かない

「まあいっか」

この一言で片付けられる。よくイーデイスに「この楽道家！」って言われたっけ

いつの間にか『夢だから』って割り切っちゃったけど…結構長い時間寝てるよなーって思う。

結局一緒に落ちてきたダイナはどうなったんだろう？

姉さんは…もう起きて小説とか参考書とか読んでるかな。

イーデイスは…自分好みの紅茶を煎れてるかな。

私は…この時間、何をしていたっけ？

そうだ、ダイナと一緒に庭を駆け回っていた…楽しい楽しい、休校の日。

お父さんとお母さんは、外でティーパーティー

私達3姉妹は、庭で遊んで…

夢なのに、結構なホームシックだなーなんて、自虐する

「この可笑しな国も居心地がいいけど…やっぱマイハウスよねえ…」

「そう？ この城が居心地いいなんて死んでも思えないけどね」

は？
え？

待って、このシチュエーション前にもあった気がする

「あの白クソウサギにニヤニヤアホ猫、首狂いの女王様がいるところなんて殺されても住みたくないよ。メアリが可哀想で仕方ない」

そろおりと後ろを向くと、視界に入ったのは小柄な少年。

薄い茶色の髪、焦茶色の眼、白い肌。眠そうな表情をしている冬は暖かそうな腰くらいまでのケープを羽織って、中には似たような色のカーディガン。

膝より少し上のチェックの短パンに、膝下までの黒い靴下、毛糸で出来たようなブーツ。

腰には小さいポーチと、ちゃらちゃらとした飾りがついている

茶色、黒色を基本にした、全体的に暖かそうな格好だ。

そして……頭には耳。ネズミみたいな耳。

ウサギ……そして猫もいるらしいけど、ネズミまでいるとは……と今更ながら驚く

彼は私の視線に気付いたのか、欠伸を中断した。

「君、アリスだね。初めまして。僕は”ヤマネ”のフィル。フィルでいいよ」

「そう、私は……言わなくても分かると思うけど……アリス。アリス・

リデル」

フィルが手を出してきたため、私も手を出し、握手をする
フィルは、私より数センチ程背丈が小さかった。

「それで——早速だけど、帽子屋に来てもらいたいんだ」
「え？」

意外な一言。

てっきり城の人だとばかり思っていたから

フィルは、少し伏せている眼を私に向け、言った

「アリスは僕を城の人かもって思ってるかもしれないけど——僕は
城の人間じゃないんだ」

「じゃあその、帽子屋……？」

「そう。帽子屋。城のふざけた人間なんて嫌いだよ。それより、は
やく。忍び込んでるのばれるとまずいし」

『城のふざけた人間なんて嫌いだよ』

その言葉に少しつかかったけど、出るときに何か言っただけと言わ
れてないし、帽子屋に行ってみることにした。

「どうやって行くの？」

「窓から降りるんだよ……っと」

フィルが窓に乗る。おいでといわんばかりに手を差し出されている
けど、私はそれをとるのをためらう。

ここが何階かは知らないけど……

バァン！ という扉が開く音と共にリクの怒鳴り声が聞こえた
フィルはそれを見て、長い溜息をついた

「ああーあ、アリスのせいで白クソウサギが来ちゃったじゃん」

「アリスのせいではありません、君のせいです」

「いま僕やりあう気ないんだー。ごっめーん括弧はあと」

どうみても挑発している態度に、リクの怒りのオーラが倍増した気がする。

もっとも私は、抱えられてて見れないんだけど

カチャという音がリクの方から聞こえた。

「そんなに死にたいんですか？」

「たかがそれだけで発砲するんだ？ 短気だな」

――発砲…だと…！？

「ねえ…っフィル…っ？」

「撃たれたくないから、そろそろ御暇するよ。じゃあね白ウサギさん。あ、アリス口閉じて」

「え？」

「まっ待ちなさい！ アリス！」

不意にフィルは私の腕をとった。そして、薔薇の茂みの中へつつこんでいった

「えっ、えっ？」

「ごめん、喋らないで」

そう言われ、私は大人しく口を閉じ、フィルに引っ張られるがままになった。

「へえ。じゃあこれからは帽子屋に居るのかな？」

「ああ、多分な。でもこれは俺の予想だから金返せとか言うなよ」

「可哀想な君から金をとるなんてしないよ。流石にあたしもそこま
で困ってないし」

「言うなあ…」

「へへっ。まあ、情報ありがと。たよりにしてるわ」

「毎回有料だそ」

「生憎、お金には困っておりませんので」

「……………」

「大切な事は2回言うもんだよ」

「まあいいか：俺は争奪戦に興味ない」

「ふうん。でも仲間になるならこっちだよ！じゃね」

「ご最屑に」

記憶の紐

いつのものか、其れが現実か夢かどうか分からない。
そんな記憶が、私にあった

『白ウサギはね、私を可笑しな国へ誘うの』

私に似た、金髪に碧眼の女の子は微笑む。
服装も一緒。顔は彼女の方が整っていると思うけれど、似ている
違うのは靴のみ。私はこげ茶色のブーツを履いていたけれど、彼女は
リボンシューズを履いていた

話している場所はよく分からない。
けれど、沢山の紅色の薔薇が咲き乱れていた

彼女は口を開く

『誘われて落ちるのは、可笑しな国。まあこれは、私がつけた名前
なんだけどね。』

可笑しな国は、紅の女王様と白の女王様がいて、それぞれが紅の

国と白の国を治めているの。

帽子屋さんは、お茶会に私を招待してくれたわ。そこには必ずヤマネと3月ウサギがいたの。

紅の城には、白ウサギとチェシャ猫がいるの。2人…2匹かしら？ 2匹とも、地位が高いの。

白の城…駄洒落じゃないわよ…は、黒ウサギとハンプティ・ダンプティがいるの。

同様、地位は高いの。けれどあまり——特にハンプティは公になつてないようね』

『彼ら…可笑しな国の住民はアリスが大好きなのよ。性別関係無くな。

嫌がるアリスもいれば、喜ぶアリスもいるわ。

私は前者よ。あんな狂った愛に纏わりつかれていたらたまらないわ。

あなたはどっちかしら？ 私はどっちでも特に批判はしないけど、逃げるなら今のうちよ。

お土産には…そうね。赤薔薇とかどうかしら？ イギリスに比べ、とても綺麗だわ』

彼女は笑う。咲いた薔薇に負けないくらいの、美しい微笑みだった。

『彼らはアリスを自分の物にしようと死物狂いで足掻くわ。

それはそれは、滑稽で滑稽で仕方がないわ。

え…何で足掻くかって、それは…アリスに気に入られようとするためよ。

あなたもいずれ分かるわ。嫌でも、必死で拒否してもね』

『帰りたい…？ 帰るにはね、この可笑しな国であなたが無くしたものを探す必要があるの。』

私の場合は…母の形見の、懐中時計。深緑色で、蓋には名字が彫つてあるの。綺麗よ。

他に、情報のみだけど…レコードという大きなものもあったわ。小さなものでは、宝物のヘアピンかしら。名前っていうこともあったわ』

『いつでも帰ることが出来るように、あなたには答えをあげるわ。失くした物が”何か”を当てるのと、失くした物が”何処”にあるのか。答えは2つ必要なの』

でも2つ目は…私にはできない。だから一つ目だけなのだけれど…』

『あなたの失くした物は――――』

ノイズのかかった記憶はいつの間にか消える

幸いなことに、薔薇の棘は落とされていたようで…思いっきり切れるということは無かった。

フィルと一緒に向かう『帽子屋』は、案外近いところにあったようだ

「ほら、ここ。帽子屋敷」

「へえ、素敵ね。結構大きいのね…って屋敷？」

「うん。帽子屋屋敷。あれ？　僕、帽子屋しか言ってなかった？」
「……うん」

フィルの、小首をかしげる動作が………可愛い。
本当に男の子かな？　女の子とかいうオチ、無いよね。うん。

屋敷の奥に足を進めながら、フィルは続ける

「帽子屋にきてって言ったのは、帽子屋側についてって意味なんだ」
「帽子屋側につくって、え？　どこかと戦争でもやるの？　暇つぶ
しのために私がこの世界に来たんでしょ？　それなのに——」

一瞬、フィルの足が止まった。しかしすぐに動き出す

「——それ、誰から聞いたの？」

「えっ…リクから…」

「そう」

カチャカチャ、と、フィルの腰についたアクセサリーが音を出す
何か、まずいことでもいったのだろうか……

不意にフィルの足がとまる
続いて私の足も止まる

「ついたよ。帽子屋の会議室」

指差されたそこを見れば、

おいしそうなお菓子や、沢山のティーカップが並べられた、大きな
テーブルの置いてある

れっきとしたお茶会会場だった

「もー、昨日宴ができなかったから今日こそって思ったんだけどな…」

「申し訳ありません」

「まあ、招待状出せばくるかな…それか延期にしようかな」

「延期がいいと思いますよー。僕は」

「正当な理由を述べよ!」

「アリスも落ち着くと思うし、色々な人に招待状が出せるし、準備の時間が長くなるじゃないですか」

「ふむ…合格」

「リクくーん。僕、合格しちゃったよ」

「五月蠅いですね。黙っててください」

「まあ、リク、ドンマイ！」

「陛下……」

「なんだ？」

「今、無性にイラッとききました」

「そうだろう、そう思うように言っただけだから」

記憶の紐（後書き）

最後のはおまけです。ごめんなさい

お茶会

『白ウサギはね、私を可笑しな国へ誘うの』

私の場合は、どう考えてもわざと連れてきたって感じですけど。

「へえ！ その子が新しいアリスなんだ！ 僕、レオっていうんだ！ よろしくね」

「俺はハワード。よろしくな、アリス」

「レオが三月ウサギで、ハワードが帽子屋。両方とも呼び捨てでいいよ」

緑色の眼と黒色の眼がこちらを見ている。

フィルに連れてこられた所は、いつもお茶会を開いている人たちのところだった。

レオは、少し濃い茶色の髪で、いたるところがはねていた。

白い長袖のシャツを肘までまくっていて、黒いチェックのネクタイ、それと同じような黒いチェックの短パンに、少し長めのブーツ。

椅子にスーツが掛かっているとところから、いつもはスーツを羽織っているみたい。

そして頭には…茶色いウサギ耳が生えている。流石、3月ウサギと

でもあろうか。

ハワードは：メアリと同じ、珍しい黒色の髪で、襟足が少し長い。深緑色のスーツに、灰色の大きなリボン、黒い七分丈のパンツ、踝程の長さの皮ブーツ、腰にはフィルみたいに、アクセサリーがついている。

獣耳は無いけど、妙なシルクハットを被っている。赤薔薇や、トランプが飾りとして着いているのだ。

それで、大きいと思ったリクより、背が高そうだった。

「知ってると思うけど：アリス・リデルよ。よろしく」

自己紹介をしながら、2人と握手をする。リク、ローザ、エース、メアリ、フィルと続いて美形揃いである

長方形のテーブルに、ハワードが：まあ俗に言うお誕生日席。私は帽子屋の近くの席に座るよう、フィルに促された。

正面にはレオ。レオの隣にはフィル。

その隣には誰も居ないけど、ティーカップやソーサー、お菓子の取り皿、ナイフやフォークまでもが揃っている。まるでいつも誰かが来ているようだ。

私の隣にも同様に、一式が揃っている。

「今日紅茶何にする？」

「アールグレイ！」

「ダージリン：」

「アリスはどっちがいい？」

「…へっ？ あっ、ダージリンかな…」

急に話を振られ、ちよつとドキツとした。とくにそういう要素は無かったけど。

ぶーぶーと文句を垂れるレオを完全無視し、ハワードは近くに居た使用人さんに紅茶を頼んでいる。

今更気付いたけど、使用人さんとかいたんだ。流石、屋敷を持って
いるだけあろうか。

私はふかふかな椅子に身を沈めた。

お茶会をやっている場所は、テラスみたいな所だ。屋敷内の植物に
目線が行くけど、城同様薔薇が多い。

眼を閉じると、紅茶やケーキの匂いが漂ってきた。

日光が気持ち良いし、眠くなってくる。フィルはもう寝ていたけ
れど。

「そういえば、ルナとレベッカさん来てないね？」

「コレット嬢はいつも遅れるからいいとして：レベッカが来てない
のは：なんでだ？」

「着る服でも選んでるのかも」

ルナ？ レベッカ？

初めて聞く名前だ。”コレット嬢”というのは、きっとその”ルナ
”の事だろう

「ねえ、ルナ：コレットさん？ と、レベッカさんて、誰？」

私が聞くと、ハワードが答えてくれた

「レベツカは、公爵夫人。説明は…聞いたか？」 上位者”だ」
「ちなみに言っただけだけど、僕達も”上位者”だよ」

”上位者” よくわからないけど特別な存在。きっとフィルもだろう。

「コレット嬢は、黒ウサギ。白の女王の側近だ」

「偉い人なのね。そういえばリクに聞いたんだけど、皆姓って名乗らないのね。やっぱり重要じゃないの？」

姓を聞いて、思い出した。思い返せば、誰も姓を名乗っていない。ハワードが少し考えている間、レオが答えた。

「重要じゃないというか…名乗らないのが普通なんだ。昔からその”上位者”の姓は同じだもん」

「そうなの。じゃあレオとかハワードとかフィルとかの姓は？」

「俺はカルディコット。ハワード・カルディコットだ。それで――」

「僕はレオ・マーチ！ マーチだよ。ほらフィル、起きて」

「ん…ん…僕は…ガー…ネット…」

「フィルは、フィル・ガーネットっていうんだ」

リク、ローザ、エース、そしてこの3人も、名前は現実世界と似ている。

礼儀として、全部覚えておけ…る…かな？ 覚えておかなきゃ。

不意に、外からガサガサという音が聞こえた。

そしてすぐに、庭に人影が見えた。

「ハワード、レオ君にフィルちゃんもお待ちせう。遅くなったわ」
おっとりとした声とあわせて見えたのは、可愛らしいドレスを身に纏った……美人だった

「いらっしやい」

丁度、紅茶やケーキが運ばれてきた。

「へえ！ 貴女がアリスなのね！ 可愛らしいわあ…」
頬に手をあて、ほう…と息をつきながら、透き通った黄緑色の眼で私を凝視するレベッカさん
美人なお姉さんに「可愛い」と言われても、素直に喜べないのが本音だ

「おいレベッカ、アリスが迷惑してるだろ」

凄いスピードでケーキを口に運ぶハワードが、フォークを休ませずに注意した。

「そんな事無いわ！ それに、こんな可愛い子が目の前に居て黙ってられるわけ無いじゃない！」

レベッカさんとハワードは、幼馴染というか腐れ縁らしい。個人的にはカレカノだとなお良し…

たけど夢でもそこまで上手くはいかないようだ。

ハニーブラウンの綺麗な髪を揺らしながらハワードに抗議する姿は、綺麗というか可愛い。

白、薄紫、黒を基調としたクラシカルドレスもよく似合っている。
座り方とか、紅茶を飲む仕草とか、いちいち優雅で、姉さんを思い

出す。

私がじっと見ていると、レベッカさんは視線に気がつき、ぱちつとウインクをした

「あ、そうそう。よくない知らせがあるわ」

よくない知らせと聞いても、私にはピンとこない。

むしろ、大変だなくと思いつつ、ケーキを食べ続けるような人だ。

「…どんな？」

そんな私とは逆に、最初に反応したのが以外にもフィル。

レオが横で「起きてたの」と呟いたのが辛うじて聞き取れた

「白の女王が動き始めたらしいわ。ルナちゃん、気をつけたほうが良いわね」

お茶会の空気が固まった。それには流石に気付く。

まだ、私は知らなかった。自分自身が騒ぎの中心にあることを。

あの、曖昧な記憶の、少女の言葉を知るときがくるとは、思いもよ
らなかった。

全ての中心となるのは、

歯車を動かすのは、

歯車をなおすのは、

歯車を狂わすのは、

最後に嘲笑うのは…

私は知らない。

お茶会（後書き）

はい、意味不明ですねヒャッ
ホウウウウウウウ

そしてそれぞれは動き出す

「いらしゃいませ、スタンフォード卿。今日はどのようなご用件でしょうか？」

「ああ…白の女王には会えますか？」

「ええ、暫くお待ちください」

白と黒のみを使った使用人服に身を包んだメイドが微笑み、廊下の奥へと消えていった。

白の女王もこのような人だったらよかったのに。

僕は今、眼に痛いほど白で埋め尽くされている城に来ている。

本来なら、あからさまにではないが少し敵対しているような場所などに来たくはない。

仕事だ。仕方のないことだ

「座っててください」と案内されたソファに座り、ぼさっと壁を眺める。

自分のいた城では仕事三昧だったから、少し疲れが出ているのかもしれない。

コツコツと足音が聞こえた。面倒くさいからその方向は見なかった。流石に何も言わず殺されることはないと思う。

その足音は、僕の少し前で止まった。

ああ、凄い嫌な予感しかしな――――

「なんでお前が居るんだ白ウサギいいいいいいいい！！！！！！！！」

怒声と共に僕が立ち上がると、さっき僕の頭があった部分にダガー

ナイフが通り抜けていった。

危ない危ない。彼女は僕を見るたびにナイフを投げてくる。
僕も彼女を見るたびに銃を抜くけれども。

「なんですか：貴女は今帽子屋に行っている時間じゃありませんでしたっけ？」

僕は、銃を彼女に向け、トリガーに指をかけた

「仕事があったのよ。今から行くところだったのに。あーあ、気分悪くなったわ」

彼女は自分の腰についたダガーナイフに手をかける。

「だから、死んで償ってよね。スタンフォード家のお兄さん」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますよ。コレットお嬢さん」

「あいつら、がねえ…」

硬い空気を壊すように、ハワードが溜息交じりで言った。

「もっと遅くに動き始めるかと思った」

「僕はちやっちょとうばって閉じ込めるタイプかなって」

続けてレオが言う。

フィルはまだ難しい顔をしていて、レベッカさんは特に何も気にしていないようだ。

「それで、レベッカさん」

「なに？」

「レベッカさんはどうするの？」

レオが意味深な事を聞く。

その質問の全てを読み取ったように、レベッカさんは口を開く

「そうね…私はあまりソレには興味がないから…」

優雅にティーカップを口へ運びながら、私を一瞥した。

……………なんか、気になるんだけど

「考えておくわ。奪い合いゲームも同時に始まるなんて、滅多にないじゃないの」

「奪い合いゲームなんてやるの？ 大切なものでも奪い合うの？」

私の素朴な疑問に、再度、場の空気が凍った

「こちら、彼は大切な客人さ。ルナ、そのナイフをしまいなさい」
僕が発砲するより前に、彼女がナイフを投げる前に、その声は響いた
彼女は驚いた顔で振り返った。

「ローズ様……」

「すまないね、スタンフォード卿。部下の非礼を許してくれないか」

ルナの後ろにいたのは、【白の女王】ローズ様だった。

僕と同じ白い髪に、赤い目。病気かと思うほど白い肌。飄々とした
笑みを浮かべている。

白いYシャツに、黒いベスト、白地にチェックのついたスカート、
黒いニーハイソックス、白い長いブーツ。

前に見たときとあまり変わらない格好。

「……大丈夫です」

「そうか、よかった。君が死ぬと”あの子”が悲しむからね」

「……………」

——本当に、何を考えているんだか：

「ルナは帽子屋に行っておいで。貴重な休憩時間だしね」

「…はい」

彼女は不満顔でその場を後にした。

僕の横を通るとき、舌打ちするのを忘れずに。

「本っ当に忌々しい奴ですね…」

溜息混じりに思わず呟く。

「ごめんね、負けず嫌いで。君がアリスを見つけたから、ルナの負けず嫌いに拍車がかかったよ」

聞こえていたのか。かなり完璧な常人だとはいえ、耳がここまで良いと驚く。

まあ、昔から予測不可能な人だとは知っていたけれども。

僕は顔に笑顔を貼り付け、彼女に向き合う

「すみません。でも、赤の女王陛下の命令だったので」

「…そっか。それで、今日の用件は？ 僕の部屋へ行こう」

「いえ、そこまではありません」

僕は、懷から赤い封筒を出す。金色の蠟で封がしてあった。

それを、彼女に差し出す

「ローザ様からです。特に詳しいことは聞きませんでした」

「ローザから？ スタンフォード君が持ってくるなんて珍しいね」

「僕がローズ様に届けては不満ですか？」

「そんなことないよ。寧ろ珍しい顔が見れて嬉しいかな」

本当に、何を考えているんだか。溜息が出そうになる。

「では、僕はこれで。失礼します」

「またおいでね。ルナのいないときにも」

ローズ様が手を振る。

僕は、返事はせず、にこっと一度笑ってから城を後にした。

まったくここは疲れる。

庭には、丁寧な育てられたと一目で分かる白い薔薇が咲き乱れていた

「目に痛いほどの白…きつと帰ったら赤が目痛いだろうな」

しかし赤が恋しいとおもいつつ、僕は帰路についた

そしてそれぞれは動き出す（後書き）

夏休みの宿題と夏休みの友テストに関して

父親とある契約をしたので
ソレを頑張らねばと意気込む毎日です。

小説の方、gdgdですみません
見てくれている人なんているのだろうか…と不安になったりw
まあ、いなくても自己満小説だからいいよね！とポジティブ思考になるなど

中幕 おかしなくにのありす・上

あるところに、アリスⅡプレゼンスⅡリデルという女の子がおりました

アリスは、楽しいことがだいすきでした。逆に、つまらないことはきらいでした。

特にお姉さんが読んでいる、絵もおしゃべりもない本なんて、アリスにはすきになれませんでした。

でも、お姉さんはだいすきでした。

妹も、飼い猫もだいすきでした。

お父さんとお母さんもだいすきでした。

あるときアリスは、ベストを着て、「大変だ、遅れてしまう」と言うしろろうさぎを見つけました。

「不思議なうさぎ！」 アリスは、そのしろろうさぎをおいかけます。

しかし途中で、穴におちてしまいました。

でも、びゅーんとはやくおちるわけではありませんでした。ゆっくりゆっくりと、おちていきます。

アリスがついたのは、ドアが沢山ある円状の部屋でした。

「どこかあかないのかしら」 テーブルの上にあった鍵をいろいろなかぎ穴にさしていきます

「ここだわ」

そこは、沢山のにんげんじゃない人たちが住む、ふしぎな国でした。

住民はアリスを歓迎し、せいっぱいもてなしました。

アリスは楽しみました。沢山の住民となかよくなりました。

頭のいかれた帽子屋さん

頭は3月、時計屋の3月うさぎさん

いつでもどこでも眠るヤマネさん

恐ろしく醜い公爵夫人さん

処刑が趣味の紅の女王様

全てに平等に優しい白の女王様

時計を肌身離さず持つてるしろうさぎさん

歪みから産まれ、捻くれたくろうさぎさん

いつもにやにやわらってるチェシヤ猫さん

お世話が大好きで、アリスと瓜二つのメアリ・アン

きのこの上にいつもいる芋虫さん

コーカスレースが大得意なドードー鳥さん

煙突掃除をいつもやってるトカゲさん

森の中で神出鬼没のトウイードル兄弟

危険だけど、根はとても優しい騎士さんたち

何を考えているのか分からないハンプティ・ダンプティさん

いろいろなところへ連れて行ってくれるグリフォンさん

アリスはみんながすきでした。

でも、ずっと心の中では

「家にかえりたい。元の生活をおくりたい」

その一心でした。

「退屈じゃないのはかまわないけど、他の世界にずっといるのは嫌だなあ」

思わず、声に出していつてしまいます。

そこからは恐怖でした。

女王様には牢に閉じ込められそうになり、首をはねられそうになったり

帽子屋さんには毒を飲まされようとしたり、

かたりきれないほどのことが起こりました。

でも、アリスはその気持ちが変わりませんでした。

そしてあるとき、紅の女王様から、一つの提案がだされます

中幕 おかしなくにのありす・上（後書き）

テストとか…

新しい住民

「知ってた？ 奪い合いゲームって、アリスを奪い合うんだよ」

不意に、耳の横から声がかかる
口調から、少し面白がっているようだ

ばっ、と横を向くと、黒色の：

……………まあ例の如く獣耳が目に入った。
小刻みにふわふわと揺れている

そして、セミロングの綺麗な黒髪。光のあたった髪とは対照的な、
雪のように白い肌、透き通るような碧眼。
袖、正面とフリルのあしらわれた白いブラウスに、サスペンダーの
ついたホットパンツ。

意味もないと思うのに、茶色のベルト。それには大きめの銀時計と
何かのケースが下がっている

黒のニーハイソックス、同色で、ヒールの高いクロスリボンシュー
ズ。手首に小さいベルトのついた手袋。

服装に凝っているというわけではないけれど、いかんせん（という
訳でもないけれども）整った顔だ。

私より年上だと思うけれど、かわいいという印象が強い。

まあ、それはおいておいて

「……………」

その前に、何がなんだか分からない。

私の後ろには…というか、忍び寄る気配は全く感じられなかった

えーっと…と迷っていると、レベッカさんが口を開いた。

「あら、ルナちゃん。久しぶりね」

「もう来ないかと思ったぞ」

「座って座ってー」

「ごめんねー。面倒くさいことがあってさ。レベッカはひさびさだね」

レオに促され、彼女は椅子に座る

”ルナ”

つまりあの、ルナ・コレットだろう。さっき話題に出てた

その、奪い合いゲーム…って

「ねえ！ 奪い合いゲームってなによ？ 大切なものでもあるの？」

きつと私の顔は見事に引きつっていて、すっごく棒読みだったと思うよ…マジで

「だから、アリス：君を奪い合うの」
ルナさんが言った。

「あっ：忘れてたけど、あたしの名前はルナ。呼び捨てでいいし、ふつうにタメでいいよ」

手を出し、握手を求められる。私はそれに応える。

「よろしく。私は：知ってると思うけど、アリス・リデルよ」
「うんうん知ってる」

ルナは笑いながら、フィルの横についた。そしていつの間にかまた寝ていたフィルの頭をぐしゃぐしゃとかきまわす

「ひさしぶり」

「……………」

変わらないの無反応。ルナはそれに慣れているのは、もう少し続けてから、私に向き合って言った

「それで、奪い合いゲームを説明すると、少し長くなるの」

「いいよ。奪い合われるのは私なんだから」

ハワードがティーカップをソーサーに置いた音がスタートの合図かというように、話ははじまった

新しい住民（後書き）

あえて、のことなんですけど

この話、服の説明を異常に細かくしてるんですよ

なんでかつつうと元が小説ではなく、私の落書きからだからです。

まあ公爵夫人とか説明超短いんですけどね。細かく決まったり。

ゲームの説明とこぼればなし（前書き）

ほとんどこぼれ話です。

作者のHPは限りなく0に近いです

変●水プリーズ

（作者は更新しないうちに薄●鬼大ファンになりましたが内容は全く関係ありません。

ゲームの説明とこぼればなし

い合いゲームは題名そのまんま。

奪

上位者がアリスを奪い合うのさ。

も一般人が全く絡まないわけではない。

上位者が、とはいって

位者に高いお金で売れたりするから。

アリスを捕まえれば上

殺し合いなんてよくあること。

武器を持ち歩かな

い上位者は自殺希望者だけだな。

でも殆どは死なないよ。

上位者は強靱

だし、学習能力も高かったりするんだ。

戦闘を

しない上位者もいるのよ。私が筆頭ね。

あとは…今の代で言うと、便利屋のトカゲや、メアリ・アンもあまり戦わないわね。

全ての始まりは、時空の歪みからこの世界へ迷い込んだ一人のアリス。

こちらの世界からアリスの居た世界へ行くことはあるけど、逆はありえなかったんだ。

白ウサギ：カーティス・スタンフォードは、そのアリスをいたく気に入った。

彼はアリスを手放したくないと思っていたようだし、アリスもこの世界を気に入った。

白ウサギは、アリスを仲の良い上位者にしか見せなかった。上位者は皆仲がよかったんだ。

アリスは上位者を気に入ったように、上位者もアリスをととても好きになった。

それだけならよかったし、聞こえはいいんだけど…上位者の愛は妙に歪んでたんだよね。

だから”他の世界にいるのは嫌だ”なんてアリスが言った暁には…ねえ

監禁、暴力、窃盗…いろいろよ。結局どうなったのかは誰も…詳しく言うところの面子は分からないわ。

でも、最後にアリスが言った言葉は残されているの。それは――

「まだアリス様と接触されてないのですか？」

「うん。もうちょっとおもしろくなってからにしようかなーって」

腑甲斐ない上司に、メアリは溜息をついた。

仕事に面白いも面白くないもあるのか——とその眼が訴えている。その訴えを無視し、彼は椅子をくるくると回しながら笑った。

「ルカ様は本当に：何と言えば動くのですか」

「なんと言っても動かないよ。その機会じゃなければね」

「ではメイドの休憩室からも動かないのでしょうか」

「メアリって割と捻くれ者？」

「さあ：私は銀燭磨きをしたいのですが：」

また、メアリは大きく溜息をつく。

手に持っていた燭台を置き、ルカ——チェシヤ猫の近くのソファに座った。

「それに、捻くれ者はあなたのほうじゃないですか？」

「そうかな」

乗っていた椅子を隅にやって、ルカ自身もソファに座った。
メアリとの間は幾らか離れている。

何を言っても、にやにやとした笑みを外さない。

メアリが儀式をし、上位者になったときからそれは何も変わっていない。

変わったのは――アクセサリーの形くらいだろうか。

「あなたは何も変わりませんね」

口をついて出た言葉に、ルカは少し目を丸くする。
しかしその目もすぐにもとの三日月形になった。

「メアリはかなり変わったね。あんなお転婆で口が悪かったのにさ」
「昔の話です」

じととした目線をルカに送る。
ルカは面白くないと思った。

「まあいいよ。女王様に怒られる前にいろいろやるから。でもレベツカさんには迷惑かけらんない」

「もうレベツカには迷惑だと思われていますよ」
「うるさいな」

笑みを崩し、むすつとした表情になる。ルカにはとても珍しいことだ。

しかし、メアリは顔色一つ変えずに言った。

「今の状況ではまだ動きませんが…もう少し状況が悪くなったら私も動きます」

「…メアリが動いた方が面白そうだけど…怒るよね、メアリ」

「勿論です」

「じゃあ…もうそろそろ行こうかな」

ルカは立ち上がり、ドアへ向かった。

少し向こうから、新米のメイドが来る気配を、ルカもメアリも感じ取っていた。

ルカがこのメイドの休憩室から出てきたのを見れば、きっと驚くだろうとメアリは思った。

ルカは勿論、何も気にしていなかったが。

「じゃあ、またくるよ。てか、またそれに会えるの楽しみにしてるよ」

「そんな縁起でもないことは言わないでください」

「じゃあ、また…イヴ」

ルカがドアを開け、出る瞬間に呟いた。

メアリにそれが聞こえたかどうかはわからない。

今は突然出てきたルカに驚き、腰を抜かした新米メイドの介抱だけを考えていた

ゲームの説明とこぼればなし（後書き）

久々です

おけおめです

しゅくだいおわってないぜ

衝撃と裏切り

「……………」

「全員が全員、乗り気って訳じゃないよ。少なくとも僕らは」

説明には、啞然とするしかない。

なんだ、私が奪い合われるのか。

何で人を奪い合うの。私は物じゃないよ。

アリスってなんなの。

夢、だから？

頭の中が滅茶苦茶になる。

え、じゃあ上位者の存在って何？

かんきん ぼうりよく せつとう ……ころしあい

———人が人を殺す？

ばんばん、と手が打ち鳴らされる。

がばっと顔を上げると、ハワードが疲れたような顔をしていた。

「だめだなあ…だから城の連中も説明しなかったわけか」

「城の連中が悪いと思ってたけど、誰が話しても反応は変わらないんだねー」

正面のレオも唇を尖らせて理解できないという顔をしていた。

「え、でも、殺され、って…」

我ながら上手く呂律が回らない。何を言いたいのか分からない。そんな私を見てか、隣のレベッカさんが、私の方を向いて言った。

「アリスは殺されることないわ。…殺されることは、だけど」
「つまり、」

斬られたり、撃たれたり、殺されかけたり。
そういうことはあるわけか…。

不意に、ルナのスクリーンを口に運んでいた手が止まる。
少し手を掃い、黒いレザーの手袋をまた手にはめる。

「アリスは殺されない。でも…」

「っ貴様——！」

がたりと音を立ててフィルが飛び起きる。

レオも目を見開き、ハワードは落ち着いていたけど、眉間に皺を寄せていた。

「…え？」

顔の横に風が吹き通ったかと思い、右を向けば、ハワードが首を傾けていて、その派手な帽子が落ちていた。

「ルカの情報、間違ってた…」

左から、誰にも聞き取れないような、でも私の耳に届いた声。

フィルがルナに向かう。いつの間にか手には——ナイフ。

そんなフィルを後ろから羽交い絞めにして止めているのは、レオ。
何が起こったかわからない。けれど、何かが起こった。

肩を叩かれ、レベッカさん方を向くと、神妙な顔で
そして、私にしか聞こえない声で、呟く。

「お菓子が勿体ないけど、それどころじゃないわね。逃げるわよ」

彼女は私の手をとって走り出した。
そりゃ、もうほんと。私と比べ物にならないくらい速く。

「ルナ：今、ハワード殺そうとしたよな」
「うん。だって帽子屋一味って邪魔だし？」

フィルが、ぎりぎりど歯軋りをした。彼女の、怒っているときの癖だ。

そんなフィルを馬鹿にするように、にこりと笑ってルナは言う。

「ハワードが死んだからって悲しまなくてもいいよ。フィルもレオも、寂しかったらレベッカも殺してあげるから」

単純な挑発だ、と、ハワードは思った。

だが、単純であればあるほど、そのまま頭に響く。今の状況——特にフィルは、今冷静な判断が出来ない状況だ。

———今期の”H i t m a n”は優秀だ

だが、感情の波が荒いルナに、”H i t m a n”は向いていない。

それを理解しているからこそ、ハワードは冷静でいられた。

あういうタイプは、自分が有利だと自覚すると、ほんの僅かだが隙ができる。

ファイルがそこを狙ってくれれば：

しかし、今の彼女にそれができるとはいえない。

——腕、訛ってたらお笑い種だよな。

平和主義の彼であるが、敵である白の女王の側近の彼女は、実際仲間ではなくあくまで敵だ。

これはやるしかない、と確信し、自分の武器であるトゥハンデッドソード——両手剣をテーブルの下から取り出し、彼女らの仲裁へ向かった

衝撃と裏切り（後書き）

お久しぶりです。生きてます。

ライブのチケット取れたやつほおおおおおいとハイテンションな毎日。

いつもハイテンションだといい加減疲れてきます。

公爵夫人の取り巻き（前書き）

最近よくサブタイトルの入力を忘れる

公爵夫人の取り巻き

道なき道を走る。

いや、正確には”走っていた”

今、私達は誰かの家の前にいる。

「アゼル君、いるかしら…」

レベッカさんは私と違い、息一つ切れていない様子で大きなドアへ向かっていった。

私って運動神経よかったと思うんだけど。

さっきの出来事は、私に理解できるものではなかった。
風が通ったと思ったら…なんだったんだろう。

ながいながいゆめ。でも、そういうこともあるかな。
夢では死なないし、もし死んだとしても、長生きできる証拠だもんね。

「アリス！」

レベッカさんから呼ばれる。彼女はノッカーに手をかけて、ガンガンと叩いていた。

……迷惑じゃないのかな、それ。

私はレベッカさんの方へ足を踏み出した。
名前を呼ばれたら、行く。一種の反射条件だとも思う。

——これがゆめだとも思う？

不意に聞こえた、頭に、直接響くような声。
驚いたのは、一瞬だけ。

割と自分って対応能力が高いなと思う。
夢だからかもしれないけど。

——ゆめにきまっているじゃない

「へえ、ふうん…」

「用が終わったなら早く解放しろクソ猫が」

「あは、酷いね。使用人の癖にさ」
「使用人？ 違うな。料理人だ」

不自然に木が揺れた。

木に登っている二人のせいだろう。

片方は、奇抜なピンク色の髪に、猫の耳。

片方は、落ち着いたハニーブラウンの髪に、コック服。

猫と料理人

職業柄、中々相容れないような2人に見える。

「まあそんなんでもいいけどさ、白の女王も動き出したって訳かー。報告しないとなー」

猫耳を生やしたチェシャ猫——ルカは、帽子屋一味の乱闘を見ながら言った。

目線の先には、怪しい笑みを浮かべ帽子屋ハワードは喋る黒ウサギ——ルナがいた。

彼の目線を辿り、料理人——ベルも同じようにルナを見た。

「お前は赤の女王についていたのだったな」
ベルが呟く。

「てか私関係ないだろ。なんで連れてきたんだよ。レベツカ様のためにケーキ作ってたのに」

ルカはちらりとベルを一瞥し、視線を元に戻しながら言った。

「レベッカさんにつく、イコール帽子屋につく。ベルの戦闘能力も馬鹿に出来ないからね。だから、屋敷に引きこもってないで現実を見てもらうため」

「大きなお世話だ。帽子屋と城はどう見ても敵対してるだろ」

「俺、心は公爵夫人の下に、だからね。帽子屋と敵対してるとは言えないよ」

「キモい。城面子共々くたばれ」

ちっ、と軽く舌打ちをして、ベルは向きを変えた。

木をつたい、屋敷へ戻るつもりだった。

「猫の戯れ事には付き合ってられん」

「ひっどいな」

ルカは視線をベルに移した。目の位置で結った髪が紅いリボンと一緒に揺られている。

「アリスとベルが接触したらそれはそれで面白いかもね」

「あ、そ」

——私たちが上位者である限り、接触しないなんてことは出来ないのだけだ。

公爵夫人の取り巻き（後書き）

猫

よくでてくるけどなかなかアリスに接触してくれない面倒な奴。
はやく接触してくれ。（切実）

料理人

なかなか私好みのデザインな彼女。
これ描く前にビジュアル決めてた。絵の出番無いけど。

時計屋

ガンガンガンガン

ドアノッカーが、激しい音を出している。
だが、館の主は物が乱雑においてある大きい机に突っ伏し、びくりとも動かないため死んだように見えた。

ガンガンガンガンガン

びく、と、館の主が動いた。肩に乗っていた短い髪が、さらりと落ちる。

ガンガンガンガンガン

館の外から、壊れると小さい声が聞こえる。

館の主は、のそりと顔を上げる。頭の上に乗っていただけの黒いベレー帽が、背中をつたって椅子の内側に落ちる。しかし彼は欠片も気に留めず、焦点の合わない目をこすった。

ガンガンガンガンガン

館の主は、ドライバーを手にしたまま、激しくノッカーのなっている大きな扉に向かった。

寝起きで意識が飛びかけ、服装は崩れていながらも、油断はしていない。扉を開けたら死んでいた——という先代のものも少なくとも無いからだ。

彼は役から、とても狙われやすい立場なのだ。

ガンガンガン――

がちやりと戸を開ければ、数拍遅れて彼を見る人影が、まず1つ。はやかったのね、ぼそりと呟いた口はすぐに弧の形になる。

「おはよう、アゼル君」

にこりと笑った来客者は、絶対に敵にならない人だった。ただ、彼女の隣にいた人影を見て、館の主は言葉を失う。

「――アリス？」

私たちの入った館はとても広かったけれど、最初の部屋はお世辞にも綺麗とは言い難い。

「座って」と言われたソファは綺麗だったけれど。（あと高級そうだった）

「ティーバックだが」

そう言って差し出された紅茶も、とても美味しいものだった。

館の主である”アゼル君”という人。
彼の本名はアゼル・エヴェレットというらしい。年も近くに見えて、
格好いい、と思う。

「白の女王は性質が悪いからな。それに似て、黒ウサギも」
「否定は出来ないわね…」

「もう過激な連中は何かしら動き始めている。帽子屋もだろう」
「ええ。私も帽子屋に協力するつもり」

ちんぷんかんぷんなお話。

私は話しこんでいる二人を尻目に、部屋を観察していた。

まず、扉の正面に大きい作業台のようなもの。ふかふかで座り心地
が良さそうな椅子もある。

作業台の上にはねじとか、機械っぽものが散乱していた。サイドの
方には、書類の束。

書類の束、っていうと、彼も上位者？

側面には、びっしり本棚。一体何冊あるのか分からないくらい。1
000冊くらいあるのかな…。

本棚は全て埋め尽くされているにもかかわらず、床に積んである本
もある。

扉の横には、私たちの座っているソファ。円になったものが幾つかある。

別に、あまり使い道も無いんじゃないかなとも思うんだけど。

他は――

「アリス」

レベッカさんの声で、我に帰る。

二人を見ると、レベッカさんはいつもの笑顔、アゼル君は変わらない無表情でこちらを見ていた。

「ゲームについて、包み隠さず話す。これが現実だ。心して聞いてくれ」

時計屋（後書き）

城面の陰が薄すぎる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5047m/>

可笑しな国のアリス

2011年10月6日01時31分発行